

ミュージカル・ドラマ「いとしのクレメンタイン」〈初演〉報告書 —制作の記録—

Accomplishments of a two-day performance of My Darling Clementine : A record of the production process

永井聡子

文化政策学部芸術文化学科

Satoko NAGAI

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、平成21年度静岡文化芸術大学「学長特別研究費」および平成22年度創立10周年記念特別公開講座（公演）ミュージカル・ドラマ「いとしのクレメンタイン」の初演制作と公演（平成22年12月17日（金）・18日（土）の2日間）の成果としての報告であり、制作過程における記録である。

公演は、本学が舞台芸術作品を自主企画制作して学生への教育とするとともに、一般公開することによって、地域における文化環境創造へのトライアルを目指し、「大学劇場」の役割とその可能性を探った。学生が舞台に様々な角度で関わることで舞台制作の動きを現実のものとして学ぶこと、大学の講堂を使用することによって学生が講義の場合と同様、日常的に教育を受ける場を与えることを意味する。

舞台芸術を学ぶ学生には、「地域に根差した創造的な」劇場運営の柱ともなるこれからの担い手として、また地域そのものの文化力向上を担える人材として育っていくことを期待するものであった。

This paper reports as the premiere production of Shizuoka University of Art and Culture "the president special research fund" and an establishment 10th anniversary commemoration special open class of performance: Musical Drama "My darling Clementine" ,2days on Friday, December 17th and Saturday on the 18th in 2010.

This performance makes it a education to the student, the role of "University Theater" and its possibility were pursued aiming at a trial to cultural environment creation in area by opening it to the public together. A student was to be concerned with a stage at the various angles and giving the place where a student gets education daily like lecture a movement of stage production as something real at our university. I expect the student who learns performing arts to be growing up as the human resources who can carry area its own culture power improvement again as a theater operation.

1. はじめに

本稿では、平成21年度静岡文化芸術大学「学長特別研究費」および平成22年度創立10周年記念特別公開講座（公演）ミュージカル・ドラマ「いとしのクレメンタイン」の初演制作と公演（平成22年12月17日（金）・18日（土）の2日間）の成果として報告をする。このプロジェクトには、研究代表の永井聡子（芸術文化学科講師）がプロデューサーとして企画制作し、共同研究者として、監修・平野昭（芸術文化学科教授）、舞台芸術アドバイザー・梅若猶彦（芸術文化学科教授）、広報アドバイザー・片山泰輔（芸術文化学科教授）が関わった。これまでも、新能や室内楽演奏会などの企画を実施してきた実績があったが、ミュージカル公演の企画制作は初めてであった。

この公演は、本学が舞台芸術作品を自主企画制作して学生への教育とするとともに、一般公開することによって、地域における文化環境創造へのトライアルを目指し、「大学劇場」の役割とその可能性を探った。舞台作品のスタッフにはプロが結集し、舞台公演の制作と教育的側面との狭間で、「プロが学生に指南」しながら舞台制作の過程を見せ、体験させる環境を作った。プロが創る舞台芸術の一端を授業で学生に関わり、また大学として作品を企画制作しようというトライアル公演である。2回だけの公演だが、準備過程には3年、学生の活動には1年弱を要した。これだけ時間をかけたのは、文化政策を学ぶ大学だからこそ、現場に接する環境を創造することが重要であるというスタンスに基づく。学生にとってはプロの舞台に触れる授業であり、教員は舞台芸術と教育との接点を見出す環境を創造したわ

けである。大学の教員がプロデューサーとしてソフトを統括すること、学生が舞台に様々な角度で関わることで舞台制作の動きを現実のものとして学ぶこと、大学の講堂を使用することによって学生が講義の場合と同様、日常的に教育を受ける場を与えることを意味する。

2. 着想から公演までの記録

2-1. 公演（特別公開講座）の概要

ミュージカル・ドラマ「いとしのクレメンタイン」

一幕十三場

2010/12/17（金）18：00開場18：30開演

12/18（土）13：30開場14：00開演

会場 静岡文化芸術大学講堂

企画・制作・主催 静岡文化芸術大学

*プレ企画：公開講座

11月25日（木）「朝倉摂の世界」対談

朝倉摂（舞台美術家）×扇田昭彦（演劇評論家）

台本・演出／伊豫田静弘

美術／朝倉摂 照明／服部基

音楽・編曲／島津秀雄

出演 田中利花 戸井勝海

ロスト・シップのバンド

島津秀雄 ピアノ 小林健作 ギター

齋藤 順 ベース 三浦 肇 ドラム

佐々木雄一 ヴァイオリン

声の出演協力（芸術文化学科）

立入正之（本学准教授）／学生有志

制作協力 東宝芸能

企画・制作・プロデューサー

永井聡子（本学講師）

《台本のねらい》※台本より転載

「歌は世につれ」と言われるが、歌が時代と共に生き、歌が希望を与えてくれた時代があった。昭和二十年八月十五日敗戦以降、日本は混乱の只中であつたが、その暗い時代の中にいち早く輸入されたアメリカ文化のうち、映画と音楽は日本中の若者の心をしびれさせた。戦前の軍歌や国民唱歌ではなくかといって、もはや戦後が終わったといわれた昭和三十一年以降のプレスリーやロカビリーでもない、その時代の歌があつた。

スタンダードジャズ、カントリーミュージックといわれる数多くの名曲は、時代のはざまの中で忘れさられがちだが、戦後という時代を、いや戦争の傷跡を背負って生きた人々を彷彿とさせる力をもっている。

ミュージカル・ドラマと名づけたこの『いとしのクレメンタイン』は、そうした名曲を縦軸にちりばめながら、現代日本の出発点となった昭和三十三年（1958年）頃の世相を背景に、戦中、戦後をからくも生き抜いてきた男女の奇妙なめぐり逢わせと、姉弟にも似た愛情を描くものである。

二人は、今日の私たちが失ってしまった人間としての一途さ、哀しさ、面白さに包まれており、現代を批評する十分な視点と力をもっている。

戦後という時代を音楽劇に託して問いかけたい。

戦争は終わっても戦禍は続く。

2-2. 公演までのスケジュール

※筆者すべての日程に立合い。

■公演より4年前（平成18年／2006年）

基本構想を設定

企画構想「大学劇場」舞台芸術の実践授業

舞台『ふたりのミュージカル』案・予算案

■公演より3年前（平成19年／2007年）

プレゼン用作品のイメージづくり

1月舞台演出、市民協働企画に精通する伊豫田静弘氏に、学生の制作スタッフが参加することを前提に、ふたりしか出演しないミュージカルの企画、舞台イメージを伝え、作・演出を下交渉

4月伊豫田氏より原案受け取る

12月キャスト候補、2人の楽屋見舞い・出演下交渉

■公演より2年前（平成20年／2008年）

プレゼン用作品のイメージまとめ

2月台本初稿上がる。

■公演より1年前（平成21年／2009年）

出演者の確定と立体化

3月学長研究費申請（企画書・予算書の提出）及びヒアリング

6月キャスト田中利花氏所属東宝芸能出演正式承諾

8月22日戸井勝海氏の出演、舞台「天翔る風に」（東京芸

術劇場）、「チャンネル」（松竹歌舞伎座）を視察。楽屋見舞いと出演交渉へ。

9月25日もう一人、候補のキャストのマネージャーと打ち合わせ。出演調整が困難に。同時進行で次のキャスト下交渉。

12月キャスト出演NGに。この間、次のキャスト探しを同時進行するも、決定まで1年半を要し、生煮えの状態が続いた。制作者としては、精神的に一番苦しい時期。男性キャストの書き下ろしであるため、イメージを変えて構想を練る。

12月5日朝倉摂氏、舞台美術に快諾。

照明を服部基氏に依頼。

音響・犬塚裕道氏他舞台スタッフ交渉

12月21日11:00 朝倉摂氏へ。伊豫田氏に引き合わせる。14:00～音楽・編曲の島津氏と伊豫田氏と顔合わせ。この時期、学生（1年生4名）が自主的参加し、東京や名古屋の稽古場調査。後、東京の稽古場となる。

■公演実施年（平成22年／2010年）

公演環境と作品の創造

1月29日作・演出の伊豫田氏、授業「舞台芸術論」にゲスト講師

2月15日伊豫田氏、朝倉氏、舞台監督・小笠原氏、大学の講堂を見学。

照明・服部氏、講堂見学。伊豫田氏ともに、舞台装置の骨格を決める。

3月23日チラシ校了・30日納品

6月22日学生全体会

6月～12月 島津氏、編曲作業

東京の稽古場を再調査、予約。連続使用、予算を考慮し決定。

7月9日チラシ・ポスターチーム打ち合わせ

出演者、スタッフの宿泊予約開始

8月キャスト、伊豫田氏、島津氏とともに東京で顔合わせ。東宝芸能の一室を無償で借用し、本読み開始。

学生とともに、チラシ等公演・講座の告知開始。

9月6日衣裳の下斗米氏、演出打ち合わせ。

9月10日衣裳の下斗米氏と下打ち合わせ。

9月14日チラシ・ポスターチーム打ち合わせ

9月17日学生（1名）を連れて、衣裳の下斗米氏と名古屋で打ち合わせ。学生の役割を決める。

舞台上下に2人ずつ、戸井氏、田中氏の早替えのアシストに張り付くことを決める。1年生4名が担当。

9月26日27日本学講堂にて、演出、編曲打ち合わせ。

キャスト揃い稽古。2月本番に向けて、空間感覚を掴む。

10月より学生が学内でチケット販売

10月11日横浜BanKARTにて、朝倉氏、扇田氏と公開講座打ち合わせ。

10月17日本学講堂にて、本読み・立ち稽古。

10月19日朝倉氏邸にて美術打ち合わせ。

10月22日学生全体打ち合わせ

10月23日学生が宣伝。創立10周年会場（オークラホテル浜松）、パーティ会場（本学）、学内他のイベント等も。

10月下旬、朝倉氏より11月25日の講座日程変更の電話が入る。しかし、なんとか25日を変更せずに予定通り行うことに決まる。

10月30日台本直し製本

11月舞台装置案出来上がるが、演出、美術間の意見にずれが見えるため調整。

11月9日名古屋にて、演出・伊豫田氏、音響・犬塚氏と打ち合わせ

11月10日公演のかわら版（ニュース）最終チェック

11月16日名古屋にて衣裳の打ち合わせに、学生1名同行。学生（4名）の役割を決める。衣裳の早替え担当に。上下袖で男女キャストに張り付くため、台本の熟読と、演出、タイミング等、学生担当の中でも最も難しい役割。

11月25日舞台美術として関わる朝倉摂氏による公開講座（朝倉氏と演劇評論の扇田氏との対談）

この公開講座は学生による当日運営。舞台設営からフロント、プログラムデザインまで。

9：00から舞台仕込み・フロント準備等。

16：00朝倉氏を浜松駅まで迎え。

18：15 対談90分

帰りも駅まで見送り。

11月26日天気予報の声を依頼した立入准教授の声を伊豫田氏が演出、音響の犬塚氏による録音。その後、学生による拍手・すすり泣き等の効果音の録音。

12月3日～8日東京稽古

ここからバンド合流。

舞台監督、美術助手、ヘアメイク担当スタッフが合流し、仕上げに向かう。

稽古期間中、プログラム構成担当の学生と電話、メールでやりとり。

12月9日午前、プログラム校了。

夕方、学生3名とラジオCMに出演。公演を告知。

12月11日音響・犬塚氏機材搬入（予算がないため自家用車で日帰りしてもらう）

12月12日浜松稽古開始：衣裳チェック、音響チェック、舞台リハーサル

12月13日仕込み：台組、舞台リハーサル

12月14日音楽リハーサル

12月15日美術仕込み、ドレスリハーサル（朝倉氏チェック）

12月16日楽器搬入、抜き稽古、衣裳・ヘアメイクゲネプロ①

12月17日ゲネプロ②、初日18時30分開演

上演時間1時間50分

12月18日千秋楽14時開演、出演者メインの一部打ち上げ。同時進行で舞台は完全撤収作業、退出。

3. 制作アシスタント・学生の活動内容

53名の学生が宣伝、フロント、チケット、チラシ、舞台、楽屋、稽古（東京・浜松）、公開講座（舞台、フロント、広報、チラシ）等のチームに分かれ、早くは2009年10月頃より活動。2010年の3月からは月一回の全体ミーティング。10月からはそれぞれ持ち場に分かれる。特に、稽古に立ち会う学生のシフト調整にチーフの学生は一苦労。一方で、宣伝隊がチケット販売。大学で定時販売できないのが辛い。学生によるチケット手売りを主にして販売。講堂のキャパは600名だが、そもそも1階席の半分の200席程

度を想定した小ステージであるため、想定以上の来客。しかし、客席後部、2階席も売り止めはしなかったため、入りが悪いように見え、この点は反省。チケット販売は、学生による努力。ほとんどが手売り。



写真一．公演の周知をする学生



写真二．舞台稽古を見学する学生



写真三．取材打ち合わせをする学生



写真一4. 会場の受付をする学生

学生(制作アシスタントスタッフ)

大学院 鈴置 陽子 川合 秀美 陳 凌洋 寺嶋 千晶 呉 耀茶	3年 石神笑美里 大畑 梓 勝山 明香 小出 ゆきの 迫 石心美 高林 米佳 野中 兼 野中真利江 野中 美香 原野 麗江 伏見 亜子 歌島 広明 山本 真衣	2年 太田 知里 大屋はるか 加藤真以美 紅林 莉子 鈴木 麻 鈴木ひとみ 塚本しおり 中野 薫 橋ヶ谷 花 藤田 郁美 堀田 暁奈 萬立 龍太郎 三尾花世子 水村 早紀 横田 優希 渡辺こまち	1年 美菜 智子 青木 志織 浦田 加藤文香子 木村明佳史 津田 侑乃 鈴木 千寿文 土屋 吉文 坪井 おり 林 江
--	--	---	---

芸術文化学科
4年
伊東 舞
岡部 訓子
川合 千寿
杉山 彩香
杉山 友梨
土屋 早代
村松なつ美

資料一1. 学生デザインのプログラム一部

4. 制作の記録

・53名の学生が参加。全員がフルタイム参加ではなく、個人差がある。授業の履修状況のみならず、個人の参加の姿勢も想定した。舞台を成功させることに集中させ、それぞれの参加率や姿勢が制作の致命的な点にならないように調整。一部単位取得には関係のない授業であったが、思いの外、自主的に動く学生の様子が見て取れた。それぞれが他の授業の合い間に時間をつくり参加。プロから直接指導を受ける。舞台美術、照明はもちろんのこと、舞台監督、

舞台スタッフのプロの指示に従い、学生が仕込み、アシスタントに参加。

・講堂は完全暗転にできない空間であり、残響的にも演劇には不向きだが、舞台の形態を逆手にステージを丸ごと劇中ステージに見立てる。シンメトリーの舞台構成に変化をつけ、二人の楽屋、バンドスペースを配置。二つの白いドアに床は黒のパンチを全面に敷き、舞台全体を「白」と「黒」でコントラストをつけた。トラスの設置は、圧倒的に足りないバトン数を補うために照明の吊り込み空間を創出。また、床に釘が打てない状況を考慮した苦肉の策。特に黒のトラスにこだわりブラックボックスを目指す。フロントサイドスポット用に上下フロントサイドに照明用の台を設置する。そのため、客席左右4席ずつつぶし、販売止め。

・衣裳・小道具は時代を反映させたものだが、舞台装置のデザインを白と黒のシンプルなデザインに決めて、ドラマをより象徴的に扱う方向とする。

・舞台転換はなく、衣裳の早替え、照明で転換を行う。衣裳の早替えには、舞台上下学生2名ずつつき、数秒を争う早替えを手伝った。一つもミスが許されない難しい役割。学生は出演者からのアドヴァイス（叱咤激励）も勉強、と泣きながら対応。現場対応にまごつく学生は即、別の学生に交代させられる。稽古、リハーサル、ゲネプロから本番まで同じ学生が張り付くことが前提の舞台ではあったが、学生が他の授業のため長時間張り付けられない。想定はしていたが、一番苦心した問題。参加意識、意欲、乗り越え方、等々。ひとりひとり違う。ただ、それをひとつひとつやりとりするには、制作担当の教員が一人では足りない。かといって、複数ではこのプロジェクトは成立しないことは明らか。

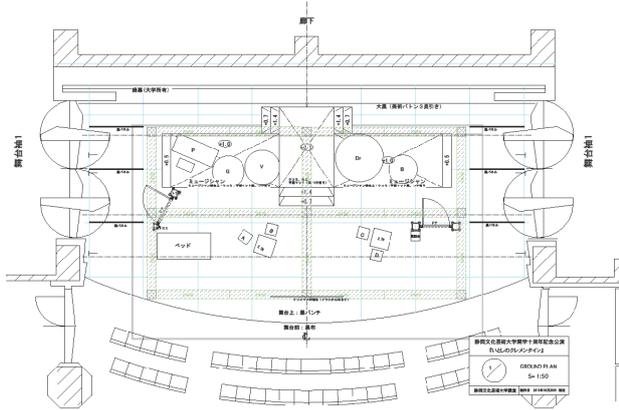
・小道具も学生がすべて調達。昭和33年とドラマの主人公を造形するに相応しい小道具選びに苦戦。一部、ネットオークションで仕入れるという学生。稽古にぎりぎり間に合うような手配に気が気でない。

・舞台美術家は舞台美術界の重鎮、朝倉摂。作・演出の伊豫田氏、照明の服部氏（公演本番直前に紫綬褒章受章）との間の調整で、悪戦苦闘。照明の服部氏から学生の前で怒鳴りつけられる。が、舞台照明の修正等進み、服部氏が「きょうはここまでにする、プロデューサー、帰っていいか」と笑顔。内心、ほっとする。

・予算の関係、学生との直接のやりとりも含めた舞台作品の実現を最優先したため、プロデューサーの下にプロの制作スタッフを置かず、筆者、学生53名のみで制作。出演者、スタッフに迷惑をかけたこと多々。しかし、プロの制作スタッフを外部に委託していたら、学生の動き、プロと学生との関係もわからずに終えたことだろう。それでは企画実施の意味がない、と、耐え忍びゲネプロを目指す。

・最終的にはプロ、学生の全員の協力でゲネプロがうまくいき、関係者全員ほっとする。学生の前で凶らずも涙が出る。前が見えない。

あとは本番。気は抜けない。



資料-2. 舞台平面図



写真-8. 公演本番③



写真-5. 公演本番直前



写真-9. 公演エンディング



写真-6. 公演本番①



写真-7. 公演本番②

- ・公演前に記事が出た。中日新聞の取材。
「大学が舞台を制作」することの意義を理解してくれたもの。この企画の主旨であり、文化政策を考える人材育成に、舞台作品を制作するための心得、判断力、集中力を学ぶ環境を作ることの大切さ、大学が自主制作をしたことの珍しさがあった。
- ・また図らずも、カラーで掲載された新聞の紙面であった。劇場に10年いたが、これほどの大きさで掲載されたことは一度もなかった。取材のポイントは、大学という教育機関が、舞台の現場という学問とは対極にあると思われる現場の演劇人と協働で制作したことであり、「プロが学生に舞台指南」をする場を創造したことである。これは、私が学生であったころからの問題意識に繋がる。学問と現場の乖離である。宣伝を目的とした記事ではない。企画の意義を認めてくれたものであった。こういう時ほど、新聞記者に感謝したことはない。望むのは、これをきっかけとして、舞台制作の厳しさを理解しながらも、学生が自主性をもって積極的に活動してくれることである。
- ・「集客の見込み」と「周知」
一番想定外であったのが、招待客70名がほとんど来場しなかった、という現実であった（その中でお来場いただいた方々には感謝を申し上げます）大学事務局から招待客70名がほとんど来ないことを告げられ、絶句する。一般客をいかに集客するか、ということが主目的ではなかった

が、本来、プロデューサーはどんな内訳でもかまわない、会場がほぼ埋まっているという印象を与えるような戦略を立てなくてはならなかった。一方で、この公演は学生のための公演である。学生には満席にすることが重要であることを強調することで、販売の意欲を駆り立てたつもりだった。もともとこの規模の公演は400名の1階席に7割入れれば多いぐらいの公演ではある。100名~200名の客席で、公演回数を重ねることで、周知にもつながるケースもある。400名を満席にすること、ましてや販売もしている2階席までも満席にすること、予算上2回以上の公演回数を重ねることなど、最初から不可能である。そもそも600名の2回公演の1200名などを入れるような公演ではない。しかし、誤算は「創立10周年記念企画」への支援が公演費以外に、10周年の周知(宣伝)として、大学にあると思いついたことであった。別途、書類等の事務的な手続きについては、事務局に、多くをご協力いただき、この度は相当に助けられた。しかし、2階席をクローズして、1階席を7割で収める方針をもった空間と販売設計を強く押さなかったことを反省している。

- ・ 指導の上の悩みは、学生にはどこまで言えばよいか、ということであった。舞台を制作するには、すべてを公開しなければならない場合と、水面下で動かなければ成立しないときがある。まだ、制作の訓練をしていない学生に対して、すべてを打ち明けることで、それに立ち向かえる精神力があるものなのかどうか未未知数であった。その未熟な精神力は、プロを入れた公演の出来に関係し、最終的には、プロデューサーの責任となり、大学の責任となる。
- ・ 観客アンケートにはほとんどが、「楽しめた」「おもしろかった」という感想。中でも、「文芸大の学生はいい勉強をしたことだろう」と企画主旨をご理解いただいた意見があったことは救われた。

それから約一年後、わたしのゼミ4年生2名が卒業を前にして、「萬谷衣里クラシックピアノレクチャーコンサート」の企画制作に挑戦した(11月21日実施)。定員150名の8割の集客、学生の成長度を見れば大きな成果となったと思う。実行にあたって思いがけない学生の判断や理解に驚かされたが、それを事前に察知してある程度注意を促し、またある程度放任して見守りながら、修羅場をくぐらせることも必要であろうと思う。実践力は修羅場の数で決まる、という外科医の言葉を思い出す。舞台芸術の現場は、命に直接関わる世界ではない、という印象をもたれるが、劇場空間で一番気を配るところは安全性が担保されている現場であるかどうかであり、舞台上に事故が起これば、それは、プロデューサーの責任である。事故の起きないような人間関係を築けること、そのような環境をつくる人材にかかっている。その人材を育てるトライをしたことも含めての授業であった。

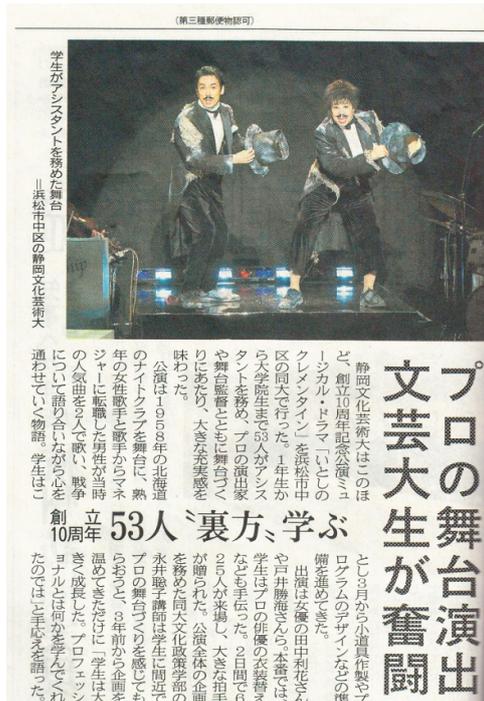
注) 授業「演劇文化論」「舞台芸術論」「ホール・プロデュース論」等で、参加スタッフ以外の履修学生に講義と見学を実施。演出家の伊豫田氏、舞台照明の服部氏は、授業の中で、仕事の中身を紹介するとともに、公演スタッフの役割を講義。



写真-10. 参加した学生と出演者



資料-3. 中日新聞夕刊記事 (2010年12月13日)



資料-4. 静岡新聞朝刊記事 (2010年12月22日)